

メディアがもたらす環境変容に関する意識調査 —電車内の携帯電話使用を例にして—

An Attitude Survey on Environmental Changes Caused by the Media —Focusing on the Usage of Mobile Phones in the Train—

石川 幹人*

要 旨

本論文は、メディアがもたらす環境変容に関する意識調査の一例を報告し、それを通して、メディア環境の設計における意識調査の役割の重要性を指摘する。本研究では、電車内の携帯電話使用は控えるべきというマナーに注目し、大学生の意識を調査した。いくつかの社会学の文献では共同体仮説（マナーは携帯電話が電車内の一時的な共同性を破壊することに由来する）が提唱されているが、本調査では音仮説（マナーは単に音がうるさいことに由来する）のほうが有力であるといった結果が得られた。しかし、共同体仮説を支持する少数意見も得られた。また、心理的な不安傾向との相関も調査したが、顕著な相関傾向は得られなかった。情報メディアの発展に伴って我々の生活様式に急速な変化が及んでいるので、こうした意識調査を機動的に行って、その結果がメディア環境の良好な設計に反映されることが望まれる。

Masato Ishikawa

Abstract

This paper reports an attitude survey on environmental changes caused by the media, and shows that such surveys can play important roles in the design of our media environment. This research surveys undergraduates' attitudes focusing on the manners that we should refrain from using mobile phones in the train. Although some articles on sociology propose the community hypothesis that the manners originate from breaking a temporary community formed in the train, the result of this research indicates the dominance of the sound hypothesis that the manners originate in annoying sounds generated by the usage of mobile phones. In the result, however, some opinions which support the community hypothesis are found. The correlation analysis of the result with Manifest Anxiety Scale shows no prominent significance. The design of our media environment should be improved timely by such surveys, since our life style has radically changed in proportion to the development of the information media.

1. はじめに：メディア環境と電話

近年、情報メディアの多様化・輻輳化が進み、我々の日々の生活にも急速な変化が及んでいる。こうした現代の情報社会において、良好なメディア環境の設計はますます重要になっている。マクルーハンが言うように、メッセージの内容でなく、メディア自体が我々、あるいは自分自身に対する

関係を変える^[1]のであるから、メディアのあり方自体を我々の生活環境の重要な要素と捉えて、それを社会制度のなかに位置づけていく必要がある。情報システムを設計する場合も、それが利用される状況・文脈をふまえ、生活環境の総体として捉える視点が重要視される。そうした利用者本位の設計思想が、たとえば「記憶指向の情報環境設計」というかたちで提言されている^[2]。

数あるメディアのなかでも、電話はメディア受容の変遷を映す恰好の研究対象となっている。吉見ら^[3]の描写をみると、電話が生活の場へと取り

* 明治大学文学部・情報科学センター
Meiji University

入れられていく過程や、それに伴うメディア環境の変容の経緯がよくわかる (pp.64-68)。

電話が家庭に普及し始めてからしばらく、多くの家庭ではこのメディアを、玄関、それも下駄箱の上などに置いていた。…電話は、家族のひとりひとりを外部の社会へ接続させていくメディアである。われわれは電話をしているとき、物理的には家の中にいても、意識としては家から出て、会話相手と回線上の場を共有してしまっている。…電話は、このような役割に最も相応しい場所、つまり家族という共同体が外部の社会と接する境界部にまず置かれていったのだ。ところが、この電話の位置が、電話利用の頻繁化・日常化とともに、次第に応接間や台所、そしてリビングルームへと移動し始める。つまり、共同体としての家族の空間のより中心部へと侵入していくのだ。そしてさらに、親子電話やコードレス電話の普及とともに、電話は両親の寝室や子ども部屋にも置かれ、家族の各々の成員を直接、外部社会に媒介するようになるのである。…こうして電話が、家庭の周縁部から中心部へ侵入してくるようになると、そこでの電話のコミュニケーション、とりわけ子どもたちによるそれは、他の家族構成員、なかでも両親との間に様々な摩擦を生じさせることになる。というのも、前述のように…電話をしている者と回線の向こうに側にいる相手との間には、ある種の声の共同性が成立している。この共同性は、それ自体は見えないものであっても、たとえば居間の片隅で受話器に笑いかける息子や娘達の姿として、他の家族成員には目に見えるものとして現れている。まさにこの光景が、食堂や居間で本来「成立しているべき」ものとして自明化された家族の共同性を不安にさらすのである。

このほかにも電話は、ダイヤルQ²やポケットベルなど、その時代での先進的サービスの基盤となっており、メディアのもたらす問題をいち早く映し出す鏡の役割をなしている^[4]。最近では1200万人を越えるiモード利用者に支えられ、携帯電話がインターネットの代表的な入口となりつつある。それに伴って、インターネットの電子メディア空間と物理的な空間とのインターフェースとして、電話（とくに携帯電話）の重要性はますます増大するだろう。

本論文では、メディア環境の問題を投げかけている事例として、電車内の携帯電話使用をとりあげる。ここ数年の携帯電話の急速な普及につれて、携帯電話利用はメディア論の観点から重要な研究対象となっている。1996年には、中村^[5]が携帯電話の利用状況を分析し、満足度との関連性を評価した。携帯電話によるコミュニケーションは社会のあり方に大きな影響を及ぼすとして、その後も多角的な議論がなされている^[6]。最近では、松田^[7]が携帯電話の利用形態を通して若者の友人関係の分析を行い、「接触可能な人の増大」に起因する「選択的な友人関係」の高まりを指摘している。電車内の携帯電話使用については、今日マナーの問題などで注目を集めているが、メディアがもたらす環境変容を考察するのに最適な題材である。というのは、電車内の携帯電話使用の状況が、物理的なコミュニケーション空間と電話を通じたメディア空間とが相互に拮抗する場として把握できるからである。

吉見らの電話にまつわる共同性の議論は、電車内での携帯電話使用へと展開することで、その問題性がより明確になる。西垣^[8]は次のように、携帯電話には旅の文化を破壊してしまう共同性の問題があるとし、それが「マナー」の由来になっている可能性を指摘している (pp.80-82)。

電車でかける携帯電話：…車内での携帯電話使用は遠慮せよという「マナー」は、騒音防止という意味ではそれほど根拠があるとは思えないのである。…考えてみると、同じ客車に乗り合わせるといのは一種の因縁である。「そで振り合うのも多生の縁」とか「旅は道連れ世は情け」などという言葉もあって、かつての長距離列車では、隣に座った他人同士が世間話をかわし、菓子や茶を分け合うといった光景もよく見られたものだ。このとき、幼い子が泣いても団体客が騒いでもよいのである。そこは一つの共同の場であり、乗客同士は一時的にせよ「他人」ではなくなるのである。…そういう「客車の中のコミュニティ」への郷愁は、私たちの心のどこかにまだ残っているのではないだろうか。…携帯電話は、残酷にも、そういう郷愁を打ち砕くのだ。…携帯電話を通じてまったく別世界、異次元の会話が始まる。そのとき客車の中で誕生しかけていた一種の共同性はもろくもぶ

ち壊されてしまうのだ。そして人間同士を分かち合おうとしない断絶、非情な無関係性がむきだしになるのである。たいして騒がしくもない携帯電話の使用が車内で嫌われる理由は、実は共同性をめぐる文化の問題なのである。

「マナー」の由来に関するこうした主張を、本論文では「共同性仮説」と呼び、以下ではその妥当性を中心に考察していくこととする。

2. 意識調査の実施

共同性仮説をふまえて、「電車内の携帯電話使用に関する意識調査」と題した調査を、大学生335人を対象に行った。この調査は、前半群182人と後半群153人に対し、2回に分けて実施したが、両群の結果の間には際立った差異は見られていない(詳細は付記を参照されたい)。調査は次頁に示す文面で行った。主に大学2年生を想定して用語・言いまわしに留意して作成したものである^[9]。なお、[]内の記述は、本論文の説明のために付け加えた、問題番号、回答比率、その他の注釈であり、調査時には記載されていなかったものである。各問の[]内のパーセント表記が、回答を単純集計した回答比率である。合計が100%に満たない問いは、その分の無回答があったことを示している。

本意識調査では、まず、A項目の質問群で携帯電話の使用頻度・利用形態を聞き、B項目の質問群で携帯電話に対して抱くイメージを聞いている。これらの質問項目で、調査対象者の携帯電話使用に対するスタンスの大枠を把握する。次にC項目の質問群で、電車内携帯電話使用についてのマナー認識に関して問う。調査対象者がマナーの由来をどのように自覚的に把握しているかを捉える項目である。D項目では、電車内で携帯電話を使用したことによる嫌悪感について問う。

続いて、E項目とF項目では、D項目と似たような状況における嫌悪感の存在について問うことで、D項目での嫌悪感の由来を明確化することを狙っている。仮に共同性仮説が正しいとすると、D項目で電車内の携帯電話使用に嫌悪感を感じたとしても、E項目の電車内の直接会話には、必ず

しも嫌悪感を感じないと想定される。電車内の直接会話は共同体内部の会話で、共同性の破壊にはならないからである。同様に、共同性仮説が正しいとすると、電車内の携帯電話使用の嫌悪感は、F項目の、街中における友達の携帯電話使用に関する嫌悪感と関連する、と想定される。街中における友達の携帯電話使用は、共同性の破壊の典型とみなせるからである。最後にG項目では、調査対象者自身の電車内での携帯電話使用経験について聞いている。

調査結果の回答比率から、単純に読み取れる内容は、次の通りである。大学生の携帯電話所有率[A1]は9割近くの高率に達している。所有者の多くは、主に友人[A3]に対して1日数回程度[A2]、日常的会話を目的[A4]に使用している。携帯電話は自分にとっても[B1]、他人にとっても[B2]便利なものであると評価している反面、周囲へ迷惑がかかる[B5]などとして、万人が持つこと[B3]には抵抗感を示している。1996年の調査[5]に見られていたような、ステイタスシンボルとしての意識[B4]はもはや低くなっている。電車内の携帯電話使用に関するマナーの認知度[C1]は非常に高いし、マナーの存在も多くが是認している[C2][G3]。ところが、電車内で携帯電話を使用したい[G1]と思っているし、実際に使用してしまっている[G2]。そのマナーの存在理由はというと、主に騒音である[C3][C4]としている。また、電波の影響も無視できない[C7]としている。電車内の携帯電話使用を見かけること[D1]も非常に多く、その際に嫌悪感を抱いた者[D2]も9割近くに達している。一方、電車内の直接会話を見かけること[E1]も非常に多く、その際に嫌悪感を抱いた者[E2]も8割近くになっている。街中で友人に携帯電話がかかること[F1]も比較的多く、その際に嫌悪感を抱いた者[F2]も半数存在する。

次に各質問項目間の相関を分析した。3つ以上の回答を要求した項目については、回答比率を参考に、次のように回答を2群に調整したうえで分析した。[A2]は「1回以下」とそれ以外の「高頻度」に分類、[A3]は低回答であった「仕事上の関係者」を無視、[D1]、[E1]、[F1]は「数十回

電車内での携帯電話使用に関する意識調査

明治大学文学部 石川幹人

(注) 本調査で「携帯電話」というときにはPHSも含みます。()の中は、最も近い言葉を1つ選んで○で囲んでください。四角枠内は、文章を自由に記述してください。その際、欄が足りない場合は、用紙の裏面に続きを記載してください。似たような質問が複数出てきますが、その都度、感じた通りを答えてください。本調査の回答は、表記の目的以外の目的には使用しません。なお、自由記述で書かれた内容は、匿名で学術報告に掲載される場合があります。

【A. 使用頻度】

- [A1] あなたは携帯電話を継続的に使用したことがある [87%] ・ない [10%]。
→ここで、継続的に使用したことが「ある」と答えた方のみ、次の質問に答えてください。
[A2] その期間の、通話のための使用頻度は、平均して1日(1回以下 [12%] ・数回程度 [72%] ・十数回以上 [5%])である。
[A3] 通話の相手は、主に(家族 [4%] ・友人 [78%] ・仕事上の関係者 [1%])である。
[A4] 通話内容を考えると、(緊急の用件 [30%] ・日常的会話 [56%])の件数のほうが多い。

【B. イメージ】

- あなたは携帯電話に対してどのようなイメージをもっていますか。
[B1] 携帯電話は私にとって便利である。(そう思う [94%] ・そうは思わない [6%])
[B2] 携帯電話は多くの人にとって便利である。(そう思う [93%] ・そうは思わない [7%])
[B3] 皆が携帯電話を使うようにするとよい。(そう思う [37%] ・そうは思わない [62%])
[B4] 携帯電話を使っている人はカッコいい。(そう思う [6%] ・そうは思わない [94%])
[B5] 携帯電話を使っていると、周りの人に迷惑がかかる。(そう思う [66%] ・そうは思わない [33%])

【C. マナー認知】

- [C1] あなたは「電車内では携帯電話を通話に使用しない」というマナーがあることを、(知っている [96%] ・知らない [1%])。
[C2] そうしたマナーは(あった [88%] ・ない [8%])ほうが良いと思っている。
それでは、そうしたマナーができたのは、どんな理由からだと思えますか。
[C3] 携帯電話は、呼び出し音がうるさいから。(そう思う [79%] ・そうは思わない [21%])
[C4] 携帯電話で通話する人が、大声で話すから。(そう思う [85%] ・そうは思わない [15%])
[C5] 近くで通話の音がすると、関係ない人が驚くから。(そう思う [34%] ・そうは思わない [66%])
[C6] 電車内は本来、通話をするような場ではないから。(そう思う [41%] ・そうは思わない [59%])
[C7] 携帯電話は、人体に有害らしき電波が出るから。(そう思う [64%] ・そうは思わない [36%])

【D. 被影響的状況】

- [D1] これまであなたは、電車内で誰かが携帯電話を通話に使用しているのを見かけたことが(1度もない [0%] ・数回ある [9%] ・十数回ある [23%] ・数十回以上ある [68%])。
→ここで、見かけたことが少しでも「ある」と答えた方のみ、次に答えてください。
[D2] その車内の携帯電話の通話のうちで、嫌な感じを受けたことは、(1度もない [10%] ・半分未満だがある [52%] ・半分以上ある [21%] ・ほとんど全ての場合にある [16%])。
→ここで、嫌な感じを受けたことが少しでも「ある」と答えた方のみ、次に答えてください。
嫌な感じを受けたのは何故だと思えますか。自由に記述してください。[記述欄省略]

【E. 比較状況1】

- [E1] これまであなたは、電車内で複数の人が顔を合わせて互いに直接会話しているのを見かけたことが(1度もない [2%] ・数回ある [13%] ・十数回ある [16%] ・数十回以上ある [69%])。
→ここで、見かけたことが少しでも「ある」と答えた方のみ、次に答えてください。
[E2] その車内の会話のうちで、嫌な感じを受けたことは、(1度もない [21%] ・半分未満だがある [64%] ・半分以上ある [9%] ・ほとんど全ての場合にある [2%])。
→ここで、嫌な感じを受けたことが少しでも「ある」と答えた方のみ、次に答えてください。
嫌な感じを受けたのは何故だと思えますか。自由に記述してください。[記述欄省略]

【F. 比較状況2】

- [F1] これまであなたは、他の人とともに街を歩いているときに、一緒に歩いている人のうちのひとりに携帯電話がかかってきて、その人が通話を始めたという経験が(1度もない [3%] ・数回ある [36%] ・十数回ある [30%] ・数十回以上ある [32%])。
→ここで、そうした経験が少しでも「ある」と答えた方のみ、次に答えてください。
[F2] その街中の携帯電話の通話のうちで、嫌な感じを受けたことは、(1度もない [43%] ・半分未満だがある [43%] ・半分以上ある [7%] ・ほとんど全ての場合にある [3%])。
→ここで、嫌な感じを受けたことが少しでも「ある」と答えた方のみ、次に答えてください。
嫌な感じを受けたのは何故だと思えますか。自由に記述してください。[記述欄省略]

【G. 加影響的状況】

- [G1] あなたは、もし状況が許せば、電車内で携帯電話を通話に使用したいと(思う [68%] ・思わない [29%])。
[G2] あなたは、電車内で携帯電話を通話に使用したことが(ある [77%] ・ない [23%])。
[G3] 使用した結果「悪いな」と思ったことか、あるいは「悪いな」と思っで使用しなかったことが(ある [75%] ・ない [11%])。
→ここで、「悪いな」と思ったことが「ある」と答えた方のみ、次に答えてください。
「悪いな」と思ったのは何故だと思えますか。自由に記述してください。[記述欄省略]

【H. その他】

- 車内の携帯電話使用に関してその他気づいた点、および、質問の作り方などの本調査自体に対する指摘事項などがありましたら、自由に記述してください。[記述欄省略]
回答者：性別(女 [42%] ・男 [56%]) [他に学科・学年、姓名のイニシャルを聞いている]
年齢(18 [27%] ・19 [35%] ・20 [27%] ・21 [5%] ・22 [3%] ・23 [1%] ・24 [1%])

以上ある」とそれ以外の「低頻度」に分類、[D2], [E2], [F2] は「1度もない」とそれ以外の「ある」に分類した。分析により相関係数の絶対値が $r=0.23$ を越えて、統計的に有意である($p<0.0001$)と判断できるものをすべて、おおよそ数値が高い順に以下に列挙する。

- (1) [D1], [E1], [F1] の低頻度／高頻度は互いに相関がある ($r=0.30-0.35$)。3状況に共通した、学生の活動性の低さ／高さといった傾向がうかがえる。
- (2) [A1], [G2], [G3] は互いに相関がある ($r=0.23-0.45$)。所有者が「加影響的状況」を経験することを意味しており、当然の傾向である。
- (3) [B1] は, [A1] ($r=0.34$) と, [B2] ($r=0.23$) と, [G2] ($r=0.24$) に対してそれぞれ相関がある。携帯電話が便利だと思う者 [B1] が, 所有しており [A1], 他人も便利だろうと思うし [B2], 電車内で通話にも使用してしまう [G2] という, 傾向を表わす。
- (4) [D2] は, [C3] ($r=0.33$) と, [C4] ($r=0.23$) に対してそれぞれ相関がある。電車内携帯電話での嫌悪感経験者 [D2] は, マナーができた理由を, 呼び出し音 [C3] や大声の通話 [C4] のためと認識している傾向を表わす。
- (5) [B5] は, [C2] ($r=0.23$) に対して相関がある。携帯電話は周りの人に迷惑がかかる [B5] と思う者が, マナーはあったほうが良い [C2] と思っている傾向がある。
- (6) [G1] は, [G2] ($r=0.35$) と, [C6] ($r=0.24$) に対してそれぞれ相関がある。電車内で使用したい [G1] と思う者が, 実際に使用してしまい [G2], また, 電車内は通話をするような場ではないとは思っていない [C6] 傾向を表わす。
- (7) 女性と, 電車内で実際に使用してしまう [G2] ($r=0.23$) との間にも相関がみられた。しかし, 女性は所有率が高い [A1] ($r=0.19$) 傾向が若干みられるので, 注意が必要である。[A1] の影響を除いた, 女性と [G2] との偏相関は, 十分には有意とは言えない値 ($r=0.17$) である。

これらの相関関係のなかで重要な結果は (4) で

あり, 嫌悪感の経験者がその理由を「呼び出し音」や「大声の通話」であるとしている点である。一方, D項目に対して, その比較状況であるE項目とF項目は, 単なる経験では (1) のように高い相関がみられたが, 嫌悪感の経験という点では, 相関はみられなかった。つまり, 電車内の携帯電話使用に嫌悪感を抱いた者が, 他の比較状況で嫌悪感を抱く (あるいは抱かない) という安定した関連性はみられない, ということであった。この範囲の調査結果では, 共同性仮説よりはむしろ, それと対立する「音仮説」のほうが有力と思われる。

また, 各項目で次のような記述があった。D項目では, 「声が大きかったから」, 「普通の会話程度ならOK」(20才・男) などの音量を問題にした趣旨の回答が圧倒的であった。わずかに, 「一方的な声しか聞こえなくて気持ち悪い」(20才・女) といった, 携帯電話特有の状況を問題にする意見があった。

E項目についても同様に, 声の大きさを問題視した意見が大勢を占めた。なかには単に「Dと同じ」という回答も多くあり, D項目とE項目の状況認識の共通性を裏づけた。

F項目では, 「自分と相手のとの空間に割り込まれた感があった」(22才・男), 「嫉妬に近いような感じがあった」(18才・男) などと, 一転して, 共同性の破壊を問題にした回答が多くみられた。

G項目では, 「寝ている人がいたから」(18才・女) と, やはり音量を問題にする意見が多かった。また, 「自分もやられるといやだから」(21才・男) といった回答も目についた。

その他の記述 (H項目) では, 「電話車両」(18才・男) や, 「車内に携帯電話用の空間」(19才・男) を作ればよいといった現実的な提案もあった。後半群では, ペースメーカーを理由にした規制の問題に関する否定的意見が, 多くあった (付記参照)。

3. 状況比較に関する追加調査

大澤^[10] は, 先の西垣と同様, 共同性仮説の立場に立つ。さらに, 電車内の携帯電話使用にまつわる嫌悪感は, 共同性の破壊に由来し, 音の大き

さに由来するものではないと、とくに強調している (pp.61-62)。

電車でだれかが携帯電話をかけていると、異様にうるさい気がしてくる。これは、べつに音が大きいかからうるさいわけではありません。隣で雑談していてもそれほどうるさくはありませんが、携帯電話でひそひそと話されると、ものすごく不愉快な気がしてくる。…人間というのは不思議なもので、一緒に同じ空間を占めていれば、お互いにはほとんど無関心だけれども、…無意識の連帯感を持つものなのです。…本当にはかない一瞬の共同性がそこでできているわけです。…そこで一人電話をかけている人がいると…その人は、目の前にいるのに、一人だけプライベートな個室に隠れているのと同じ状態になります。…そこに見えない空間の断絶が生じているから不快なのです。…ですから、いくらひそひそ話でもダメです。だいたい、ひそひそ話せばよけい不快です。音の大きさ問題ではないのです。

今回の調査によると、電車内携帯電話使用による嫌悪感の、少なくとも自覚的な主原因は音の大きさであるという結果が得られた。しかし、自由記述の一部には、共同性仮説を支持するようなコメントも見られた。ことによると、共同性仮説によって説明されうる意識や態度が、自覚していないところで影響しているかもしれない。そこで、次頁に示すような状況比較に関する明示的な質問P、Qを作成し、共同性仮説によって説明されうる意識を探し当ててみることを試みた。

質問P、Qについて、同一の学生群を対象に追加調査し、246人の回答を得た。これらの質問は比較的複雑であるため、回答は自由記述とし、記述内容を著者が判断して次の分類を行った。

- (1) 質問を理解できない、あるいは質問を誤解した回答
- (2) 質問に対して共感する趣旨が読み取れる回答
- (3) 質問に対して共感しない趣旨が読み取れる回答
- (4) 単に共感するという回答
- (5) 単に共感しないという回答

質問Pの回答比率：

- (1) 31.7%、(2) 41.1%、(3) 18.7%、
- (4) 5.7%、(5) 2.8%

質問Qの回答比率：

- (1) 13.4%、(2) 9.8%、(3) 44.3%、
- (4) 5.3%、(5) 27.2%

単に共感する／しないという回答は、質問の趣旨が理解できてない可能性があるので慎重に扱う必要があるが、(2)：(3)の比率が、(4)：(5)の比率におよそ等しいので、次のことが結論できる。質問Pについて、共感するという回答が、共感しないという回答のおよそ2倍であり、質問Qについて、共感するという回答が、共感しないという回答のおよそ4分の1から5分の1である。ただし、質問文にある「意外に多く」という記述が、「共感する」という回答を誘導する可能性にも留意しておく必要がある。この追加調査は、潜在的な意見を掘り起こす目的で実施したものであるため、量的な「比率」よりも質的な「意見」を重視して分析する。

質問Pにおける回答の数字上の比率では、電車内の携帯通話は直接会話と同様に扱うことができるという主張が比較的多かった。つまり音仮説のほうがより多く支持される傾向を示した。一方で、直接会話にはない、携帯電話特有のコミュニケーション上の特徴を指摘する具体的な意見もあった。それらは、共同性仮説のほうを支持するものである。たとえば、「直接対話の場合は、周りの状況を把握できる」(20才・女)というのに対して、「携帯で話すと通話の方に神経がいて、周りがどんな目でみているか感じなくなるのが問題」(21才・女)といった主張は、電車内の生活空間が携帯電話の周囲で不健全な状態になりやすいことの具体的な指摘であろう。すなわち、それが高じると、大澤が言うような「メディア空間の断絶」といった状況になるとも言える。「携帯で話しをされると、一方的で、誰に話しかけているかわからずとまどう」(18才・男)などの報告には、その断絶の兆しが見てとれる。こうした断絶への予感が、「携帯電話での会話は自己中心的な感じがあり不快だ」(20才・男)などの携帯電話通話に対する漠然とした

不快感をもたらし、本項目の「共感できない」という回答をもたらしたと考えられる。

質問Qにおける回答の数字上の比率では、街中の友人の携帯割り込み通話と、電車内における他人の携帯通話との間に共通点はない、とする意見が大勢を占めた。つまり共同性仮説は数字のうえでは否定される傾向が出た。しかし、わずかながら、両者の共通点を積極的に肯定する、共同性仮説を支持する意見もみられた。「(電車内では携帯電話はもとより)CDを聞いていたり耳栓している人も同じく、その場にいる私たちの存在が遮断された感じがする」(19才・女)といった報告には、前述の「メディア空間の断絶」と同様の状況把握が垣間見える。また、「(友人の携帯割り込み通話と同様に)車中では共同の場が妨害されるから」(18才・女)という具体的な指摘には、西垣が言うような「共同性をめぐる文化の問題」が潜んでいることも感じさせる。さらに、電車内での携帯電話を気にするのは「日本人の平均を愛するところにある」(18才・男)とか、「日本人は襖と障子の文化だ」(19才・男)などという指摘をみると、日本の伝統的文化との関連性も無視できないと思われる。

以上の調査結果から、電車内の携帯電話通話に関するマナーの由来は、数字上、音仮説を支持する結果が得られた。が、共同体仮説を強く支持する少数の意見があり、共同体仮説も捨て切れない、といったことが判明した。

4. 回答者の心理傾向との関連性調査

西垣は、携帯電話の普及の裏には、疎外への恐怖がつきまといっているという指摘を、新聞のコラム「携帯電話考～普及の背景に疎外と断絶への恐怖～」(読売新聞夕刊、平成8年8月13日第4面)で述べている。

…「いつでもどこでも仕事の連絡ができる」「いつでもどこでも仲間とおしゃべりできる」「いつでもどこでも恋人の声が聞ける」——携帯電話が保証するのはそういうことだ。だがそれこそは、自分の知らないところで高速の情報流が渦巻いており、下手をすると自分がのけものにされるという、根深い疎外の恐怖の裏返しではないだろうか。情報化社会においては、会社や市町村や家族といった従来の共同体が徐々に明確な輪郭を失っていく。言いようのない孤独感が鋭く人々の胸を刺すことになるだろう。自分の小さな私的領域を何とかして確保し、そこに聞き慣れた会話の声を呼び込むことで、自分のおぼつかない足元を支えたいという切望が生れるとしても、いっこうに不思議ではない。その切望とともに、人々は携帯電話を護符のように抱え歩くことになる。…携帯電話は騒がしい。だがその騒がしさは、つねに一種の寂寥感をおびている(西垣通)。

西垣の指摘に従えば、不安に関する心理的傾向と、携帯電話の利用形態との間にはなんらかの関連性があるべきである。そこで、顕在性不安検査(MAS: Manifest Anxiety Scale)を今回の調査対象者の一部に追加実施した。MASは、総合的人格検査として定評のあるMMPI(Minnesota

[P. 比較状況1との比較]

以前の調査では、電車内で複数の人が顔を合わせて互いに直接会話しているのを「嫌だな」と思った人が意外に多く、携帯電話使用と同様に、電車内の直接会話も控えるというマナーを設けるべきかとも感じられました。一方で、携帯電話の通話は、片方の人の話の内容しか聞こえないので「気持ち悪い」といった、携帯電話通話特有の問題を指摘する声もありました。

そこで質問です。もし携帯電話の呼び出し音がバイブになっていて周りには聞こえず、かつ人体やペースメーカーに影響を与えるような電波も出ないとした場合、携帯電話の通話はマナーのうえで、直接会話と同様に扱えるのではと考えますか。つまりそうした場合、直接会話認められているなら、携帯電話通話も認められるし、携帯電話通話が認められないなら、直接会話も認められないのが妥当であるという主張に共感しますか。思うところを書いてください。

[Q. 比較状況2との比較]

以前の調査では、他の人とともに街を歩いているときに、一緒に歩いている人のうちのひとりに携帯電話がかかってきて、その人が通話を始めるのを「嫌だな」と思った人が意外に多く、電車内通話と同様に、そうした割り込み通話も控えるというマナーを設けるべきかとも感じられました。割り込み通話をされると、疎外感や孤独感、あるいはその人に対する嫉妬心を感じるという声もありました。

そこで質問です。電車内の携帯電話通話を「嫌だな」と感じる人が、街での割り込み通話も「嫌だな」と感じているといった場合、「嫌だな」と感じる理由に共通性が多少なりとも含まれていると考えますか。つまり、電車内にたまたま乗り合わせた人に携帯電話の通話が入ることにより、疎外感や孤独感、あるいはその人に対する嫉妬心のような感覚を周囲の人に抱かせてしまうということが、電車内の携帯電話通話を「嫌だな」と感じる理由のひとつにあげられる、という主張に共感しますか。思うところを書いてください。

Multiphasic Personality Inventory)^[11] から、50項目を抜き出したもので、個人が抱く不安すなわち身体的、精神的な不安で明らかに意識されるものを測定し、その不安の程度を明らかにする検査法である。またMMPIから嘘検知項目も15項目抜き出され、混在して配列されている。

前半群に対してMASを実施したところ、110の回答が得られた。嘘検知項目と無応答項目が合わせて10項目を越えた回答は無効とした。その結果、有効回答数95、スコアの平均22.5、標準偏差7.1であった。MAS手引^[12]によると、大学生の平均スコアは17.8であると記載されているが、その平均値に比べ、今回の調査では不安の程度が極めて高く出ている(t検定： $p<0.00000001$)。

MASスコアと各質問項目との相関を調べたところ、相関係数の絶対値が $r=0.3$ を越えた項目は、ただひとつだけであった。それは、MASスコアの高い不安傾向にあるとされる者は、「近くで通話の音がすると、関係ない人が驚くから」[C5]に「そう思う」と応える傾向が高い($r=0.34$)、というものである。この関係には統計的な有意性($p=0.00083$)も検出された。[C5]の質問は、漠然とした不安を表現した質問項目になっているので、相関傾向の検出も納得のいくものである。それ以外の質問は、P、Q項目も含めて、全く相関が検出されなかった。

調査対象群に不安傾向が高いと判定される学生が多数含まれていることから、何らかの意味ある相関関係が期待されたが、とりたてて検出されなかった。その原因のひとつとして、携帯電話がより実用的な「必要性」(松田^[7])のもとに使用されているという、最近の傾向があげられよう。4年前の中村の調査^[5]でみられた、携帯電話がステイタスシンボルのように扱われる傾向が、もはや今回の調査ではみられなかったのは、先に述べたとおりである。西垣の指摘がなされてからも4年が経過しているが、携帯電話が不安の解消手段として扱われる傾向も、同様に、この4年間に急速に減少したのかもしれない。

5. おわりに：意識調査の役割

今回の意識調査では、電車内の携帯電話使用に関するマナーの由来は、音の大きさであるという認識が圧倒的であることが明らかとなった。また、少数ではあるが、携帯電話使用によって電車内の共同性が破壊されるという、共同性仮説を支持する意見も得られた。本意識調査は大学生を対象にしたので、携帯電話の利用者全般の調査ではないが、いわゆるヘビー・ユーザーを対象としたことになるので、典型的な意見の収集ができたと思われる。

こうした意識調査の結果を、より良好なメディア環境の空間設計へと活用することができる。音の大きさが問題ならば、たとえば、文字通信を併用できる携帯電話を使用することでメディア環境が向上できる。電車内では受信内容が音声認識技術で文書にして表示されるなどの、高度な機能が実現できるとなおよいだらう。またさらに、共同性仮説が問題として残るのであれば、社会的な仕組みで解決する方法が考えられる。ちょっと奇異ではあるが、電車内で受信した際には頭からネットをかぶって通話するなど、特定の空間に身をおくことにするのだ。まさに日本的な「障子と襖による空間の管理」である(ペースメーカーについての対策も別途必要ではあろう)。

情報メディアが輻輳しつつある今日、電車内での携帯電話使用のように、メディア環境の迅速な整備が望まれる局面が増大している。そのためには、意識調査による現状把握が、何にも増して重要である。また、小規模な調査をこまめに行うという観点も肝要である。情報技術の急速な進歩と普及により、利用者の意識も時間や地域によって刻々と変わっていくからである。

これまで、情報メディアに関する意識調査というと、企業が開発する商品やサービスに関連づけたものが中心になりがちであった。しかしこれからは、広く我々の生活環境に注目した意識調査を実施し、メディアがもたらす環境変容をいち早く見抜いた、社会的対応が求められる。それこそが、情報メディアの技術発達を適切に方向づけ、情報文化の進展を促す活動であろう。

なお、この研究の一部は、明治大学科学技術研究所「重点研究」の支援を得て行ったものである。

付記. 前半群と後半群の比較

前半群182人は、埼玉県内の私立大学文科系学部の一般共通科目講義「情報倫理」の履修者を対象に、平成12年4月12日に行った調査結果であり、後半群153人は、都内の私立大学文科系学部の一般共通科目講義「人間と情報」の履修者を対象に、平成12年4月21日に行った調査結果である。

前半群と後半群との回答の差異を統計的に検定^[13]したところ、 p 値が5%以下となる有意な差が検出されたのは、次の4項目のみであった。

- (1) [A1] で「携帯電話を継続的に使用したことがある」と答えた比率が、前半群で91%、後半群で83% (カイ2乗検定で $p=0.0062$)。
- (2) [B3] の問いで「皆が携帯電話を使うようにするとよい」と答えた比率が、前半群で46%、後半群で27% (カイ2乗検定で $p=0.0002$)。
- (3) [G2] の問いで「電車内で携帯電話を通話に使用したことがある」と答えた比率が、前半群で82%、後半群で70% (カイ2乗検定で $p=0.0069$)。
- (4) 前半群の年齢の平均が19.5才、後半群の平均が19.0才 (t 検定で $p<0.0001$)。

年齢の差異(4)は、前半群に2年生の履修者が多く、後半群に1年生の履修者が多かったことを反映している。差異(1)と(3)は、大学生活の長さの差からくる携帯電話利用経験の差として説明でき、(4)の年齢の差異に根拠を求めることができよう。しかし、先の相関の分析においては、年齢と携帯電話所有率[A1]との間には相関が見られていない。この理由を分析すると、携帯電話の未経験者は年齢の若い男性に集中していることが判明した。全群集計において、分析集団の18、19才の人数は男女ほぼ同数で、そのうち女性の未経験者はわずか3%であるのに対して、男性の未経験者は20%にもものぼる。20才以上では、男性の未経験者は10%未満に減るものの、分析集団の女性の人数が男性の半分になってしまうため、年齢と携帯電話利用経験との間には相関が検出されないのである。

差異(2)については、年齢の差異に根拠を求めることができない(先の相関の分析において、年齢と[B3]との間には相関が見られていない)。さらに差異の度合いも差異(1)や(3)より大きく、考察を要する。ひとつの可能性として、前半群の大学はキャンパスが広く授業を行う校舎が分散しているため、「(同じキャンパスに通う学生)皆が携帯電話を使うようにするとよい」と答える比率が上がったことが考えられる。

もうひとつの可能性として、JR東日本のペースメーカーへの影響を理由にした満員時の携帯電話禁止放送が、4月17日から実施された影響が考えられる。これに関するマスメディアの報道が、ちょうど前半群と後半群の調査時期の間に大きくなされた。次に朝日新聞(平成12年4月14日朝刊 第14版 第39面)の報道例をあげておこう。

「車内ケータイ満員時禁止」

満員電車内では携帯電話の電源を切るよう、JR東日本は17日から、車内放送で呼びかける。これまでは「ご遠慮ください」と使用自粛を求めただけだったが、心臓のペースメーカーなどに悪影響を与えるおそれがあることから、「電源をお切りください」と放送する。同社は「呼び出し音を出さないマナーボタンでも電波は出るので、あくまで使用禁止を求める」という。

電源オフを求めるのは、朝夕のラッシュ時間帯。混雑していない時間帯は、これまで通り使用自粛を呼びかけるが、放送回数は増やす。5月末まで、ポスターや車内張り広告も張り出す。

JR東日本の車内放送に、携帯電話が登場したのは1992年。新幹線や特急を対象に「使用はデッキで」と呼びかけていた。普通電車では96年、「迷惑にならないように」とマナーを訴える放送を開始し、97年からは「使用をご遠慮ください」と自粛を求めた。

携帯電話をめぐって、同社には年間約200件の苦情が寄せられ、そのうち8割は使用禁止を求めているという。同社営業部は「マナーは向上しているはずだが、携帯の普及スピードがそれを上回っている」と話す。

こうした報道等の影響で、「皆が携帯電話を使うとペースメーカーを使用している人は困るである

う」という推論が働き、差異(2)を生んだ可能性が指摘できる。ペースメーカー報道から敏感な影響があると想定される[C7]にも、ある程度の差異が見られている。[C7]の「携帯電話は人体に有害らしき電波が出ることからマナーができた」に肯定的回答をしたのは、前半群で60%、後半群では68%である。ただしこれは、有意な差異とまでは言えない($p=0.126$)。

自由記述を見ても、後半群でのJRの使用禁止に関する意見の増加が見られる。自由記述記入件数は、前半群で8件、後半群で9件であったが、うち、JRの使用禁止に関する意見は、後半群のみで5件であった。後半群では、「とてもたくさんの方が使用している機械に左右されてしまうような機械(ペースメーカー)を人体に用いていることの方が危険で問題」(18才・女)とか、「留守電サービスを無料にするなどしないと(使用禁止は)無理である」(18才・男)などと、使用禁止の実効性を疑問視する意見がほとんどであった。

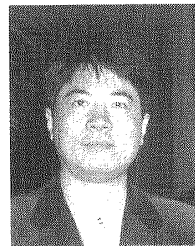
前半群と後半群の差異に注目して議論したが、差異は以上に述べた点に限られており、質問項目全体に比較してごくわずかである。差異があったというよりは、むしろ両者はほとんど同じであったと言える。このことから本調査は、首都圏私立大学文科系学部学生の一般的意識を、おおよそ表わしていると判断できよう。

参考文献

- [1] マーシャル・マクルーハン：『メディア論』、みすず書房(1964, 邦訳1987)
- [2] 石川幹人：記憶と記録と情報文化～記憶指向の情報環境へ～、情報文化学会論文誌、第6巻第1号、pp.11-17(1999)
- [3] 吉見俊哉、若林幹夫、水越伸：『メディアとしての電話』、弘文堂(1992)
- [4] 石川幹人：『人間と情報～情報社会を生き抜くために～』、培風館(1999)
- [5] 中村功：携帯電話の「利用と満足」～その構造と状況依存性～、マス・コミュニケーション研究、第48号、pp.146-159(1996)
- [6] 常木暎生：移動体通信と日常的コミュニケーションをめぐる諸問題、マス・コミュニケーション研究、第52号、pp.173-174(1998)
- [7] 松田美佐：若者の友人関係と携帯電話利用～関係希薄論から選択的関係論へ～、社会情報学研究、第4巻第4号、pp.111-122(2000)
- [8] 西垣通：『メディアの森』、朝日新聞社(1998)
- [9] 大谷信介編：『社会調査へのアプローチ』、ミネルヴァ書房(1999)
- [10] 大澤真幸：電子メディアの共同体、『メディア空間の変容と多文化社会』所収、青弓社(1999)
- [11] MMPI新日本版研究会編：『MMPIマニュアル』、三京房(1993)
- [12] J. A. テイラー、阿部満洲、高石昇：顕在性不安検査MAS使用手引、三京房(1985)
- [13] 石川幹人：『体感する統計解析』、共立出版(1997)

2000年7月4日受理

2000年9月29日採録



石川幹人(いしかわ まさと)

1959年東京生まれ。東京工業大学理学部卒業。同大学院総合理工学研究科、松下電器産業(株)東京研究所、(財)新世代コンピュータ技術開発機構などを経て、

現在、明治大学文学部助教授。博士(工学)。専門は知能情報学。著訳書に「人間と情報」(培風館)、「ダーウィンの危険な思想」(青土社、共訳)、「心とは何か～心理学と諸学の対話」(北大路書房、共同編著)などがある。第4回情報文化学会賞(産業部会賞)受賞。情報文化学会、社会情報学会、認知科学会、行動計量学会、人工知能学会、科学基礎論学会などの会員。心の科学の基礎論研究会世話人。